

コロナ時代のタイ日本語パートナーズ派遣事業の試み

ーオンラインによるカウンターパート教師向け日本語セミナーを具体例としてー

大田祥江・西島阿弥子・早川直子・ナリサラーン トンミー・
アーパーポーン ナオサラーン・ラサー セウイクン

1. はじめに

ASEAN10か国と中国・台湾の教育機関に、日本語教師・生徒のパートナーとして日本人ティーチング・アシスタントである日本語パートナーズ（以下、NP）を派遣する日本語パートナーズ派遣事業（以下、NP事業）が2014年に開始されてから2020年で7年目を迎えた。

NP事業は、アジアの日本語教育支援を目的とした事業である。NPの役割は、カウンターパートとなる現地日本語教師（以下、CP）のアシスタントとして授業をサポートすることや、日本文化の紹介を通じて、派遣校の生徒や地域の人たちと交流することである。NP自身も現地の言葉や文化を習得し、活動のことや現地のことをSNS等を通じて日本に伝え、アジアと日本の架け橋となることも目標としている⁽¹⁾。

タイはインドネシアに次ぎ2番目に多くのNPが派遣されており、2014年度の1期から2019年度の7期までで計375人が派遣された。8期にあたる2020年度は5月から12月にかけて84名のNPを中等教育機関へ派遣予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で派遣中止を余儀なくされた。混沌とした状況の中、国際交流基金バンコク日本文化センター（以下、JFBKK）においても、NP派遣校に対してどのようなサポートを続けられるか模索することとなり、2020年度はオンラインでの日本語教育支援事業を複数実施、計画中である。

本稿では、コロナ禍の中でJFBKKがタイNP8期派遣校のCPに対して行ったオンラインによる支援の第一弾「CPオンライン日本語セミナー」について報告する。セミナー実施の成果と課題を踏まえ、収束の見通しが難しいウィズコロナ時代における今後のNP事業の可能性と課題について述べる。

2. CPオンライン日本語セミナー実施の背景

2.1 コロナ禍によるタイNP8期の派遣中止

世界的に2020年1月頃から新型コロナウイルスの感染拡大が始まった。それを受け、国際交流基金（以下、JF）とタイ教育省との協議の結果、例年通りのNP派遣は難しいとの結論に至り、3月末にNP8期の派遣中止を決定した。タイ政府は3月26日に非常事態宣言を出し、大規模

なロックダウンが始まった。JFBKK も3月末から6月半ばにかけて在宅勤務となった。4月および5月はスーパーや銀行等一部の施設を除いて大半の商業施設が営業停止となった他、在宅勤務に切り替わった企業も多く、日頃は人や車で賑わうバンコクは一気にゴーストタウン化した。感染状況が改善された5月下旬から段階的に商業施設が営業再開され、少しずつ日常を取り戻しているが、本稿執筆時の8月末現在も、非常事態宣言を9月末まで延長することが決定している。

2.2 コロナ禍におけるタイ中等教育現場の状況

緊急事態宣言の発令により中等教育機関も影響を受けた。表1のように例年5月中旬に始まる新年度を約1ヶ月半遅らせる措置が取られたのをはじめ、学校行事や学内外の日本語コンテストの多くも中止や延期、実施未定となり、日本語教育関係のイベントの実施や学校スケジュールに大幅な変更が生じている。

表1 新型コロナによるタイ中等教育機関への影響

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	
従来	← 【前期】 5月中旬～9月下旬 →					← 【後期】 10月下旬～3月上旬 →							
2020年度						← 【前期】 7月1日～11月13日 →				← 【後期】 12月1日～4月9日 →			

2020年度は5月中旬から7月までの約1か月半は原則として学期休みとなり、教室での授業は行われなかったが、生徒の学びを保障するため、Google Classroom や Zoom、Facebook、YouTube 等のオンラインツールを用い、既習部分の復習や課題提出を行った学校もあった。生徒のインターネット環境や学校の設備等は現場により大きく異なり、オンライン授業を行うか否か、用いるツール、学習内容等については全国で統一されておらず、学校毎の方針に委ねられた⁽²⁾。

7月1日に新年度の授業が開始してからも、教育省からの通達により、生徒数が多い学校を中心に、社会的距離を保つために分散登校やオンライン授業が行われた。その後、タイ国内での新規感染が収まりつつあったことから、8月13日に同省から通常授業を再開するよう通達が出され、対面での通常授業が再開された。コロナ禍の先行き不透明な状況下で、中等教育現場の教師に求められることも刻々と変化している。

3. CP オンライン日本語セミナー実践報告

3.1 セミナーの概要

新型コロナウイルス感染拡大の影響で NP8期の派遣を見合わせる事が決定されたこと、

ロックダウンにより新年度の開始が延期されて教師が自宅待機となったことを受け、派遣校への支援第一弾として、CPを対象としたオンライン日本語セミナーを実施することにした。

NP不在の中、CPが日本語を使って他者とやりとりしたり、CP同士交流したりする機会が減り、かつ各学校現場でオンライン授業の実施が求められつつあったことから、セミナーの目的を【日本語】【交流】【体験】の3つを柱として以下、表2のように設定した。

表2 CP オンライン日本語セミナー概要

目的	(1)【日本語】日本語でやりとりする機会を通じて、日本語力を維持する。 (2)【交流】CP同士の交流やネットワークづくりの機会を提供する。 (3)【体験】オンラインの日本語授業を体験する。
期間	2020年5月26日～6月25日 全5回(週1回、1回1時間)
参加者	CP 47名(JLPT N2 9名、N3 24名、N4 11名、N5 1名、未受験2名)
クラス	全4クラス(火曜午前・火曜午後・木曜午前・木曜午後) 1クラスあたりの受講生数：12名(1クラスのみ11名)
担当者	セミナー実施担当：JFBKK タイ人専任講師4名、JFBKK 日本語専門家4名 テクニカルサポート・連絡担当：タイ人調整員4名、日本人調整員2名
使用ツール	Zoom、Facebook、LINE 他
教材	『いろいろ 生活の日本語 初級2 (A2)』

日本語教材は『いろいろ 生活の日本語 初級2 (A2)』(以下、『いろいろ』)を使用した。『いろいろ』を採用した理由は、CPが日本語で話したいと思えるような親しみやすいトピックが多く、かつPDFやMP3がオンライン上で無料公開されており、オンライン授業の準備が容易で著作権に関わる手続きを行う必要がなかったためである。各回のテーマと学習内容は、参加者が興味を持って取り組めるようにと考え、表3のように設定した。

表3 各回のテーマと学習内容

回	テーマ	『いろいろ』該当課
1回目	自己紹介	第1課「先週、日本に来たばかりです」
2回目	食事	第4課「しょうゆをつけないで食べてください」
3回目	旅行	第5課「早く予約したほうがいいですよ」
4回目	日本の年中行事	第9課「成人の日は、何をするんですか？」
5回目	NP ゲストセッション	—

セミナーの時間は1回あたり1時間と設定し、上記『いろいろ』の1課の内容を半分以下に削り、Can-doも1つないし2つに絞った。テーマと学習内容は4クラス共通としたが、各クラスで進め方にアレンジを加えた。セミナーのより詳しい内容は3.3に記す。

3.2 セミナー実施準備

3.2.1 企画から募集まで

3月末に NP8期の派遣中止が決定し、新学期開始を7月1日まで延期するとの情報を得て、NP 8期派遣予定だった84校の CP を対象に行うオンライン日本語セミナーを4月頭に企画し、JFBKK 内での承認を得た。セミナーの期間は、CP の多くが在宅勤務となっていた5月と6月の平日週1回、全5回とし、7月1日の新年度開始前に全クラスが終了するよう配慮した。

5月頭に NP チーム調整員⁽³⁾ (以下、調整員) より NP8期派遣校の CP へ募集メールを送信した。希望者は Google フォームで申し込みをする方法を取り、先着順で受け付けた。担当講師の数からクラス数を4、定員を40名に設定して募集開始したところ、開始直後に定員に達したため、8名追加し48名とした。決定後1名がキャンセルし、最終的に参加者は47名となった。CP の日本語レベルは、JLPT の N2 9名、N3 24名、N4 11名、N5 1名、未受験2名と幅広かったが、CP 同士の交流を深めるため、日本語レベル別のクラス分けではなく、居住地域や年齢のバランスに考慮して4つのクラスに分けた。

3.2.2 セミナー担当者

セミナー講師は、JFBKK タイ人専任講師4名、日本語専門家4名の合計8名が担当した。また、テクニカルサポートおよび CP への連絡等の諸事務作業は、タイ人調整員4名と日本人調整員2名の合計6名が担当した。4クラスそれぞれを講師2名 (タイ人専任講師と日本語専門家) と調整員2名 (タイ人調整員と日本人調整員) の合計4名がチームを組んで担当した。3月下旬から JFBKK は在宅勤務期間に入ったため、伝達や打ち合わせは全て Microsoft Teams のチャネルやチャット、ビデオ通話機能を用いて行った。

3.2.3 使用ツール

1時間の『いろいろ』セミナーではオンライン会議システム Zoom を使用した。また、Facebook グループと LINE グループをクラス毎に作成し、Facebook は主に授業内容の伝達や課題提出に使用し、LINE は細かな事務連絡や授業中のトラブル対応に使用した。以下に、Zoom を採用した理由と、運用上のルールについて述べる。

Zoom を採用した理由は、クラス全体と少人数の両方の活動が可能なオンライン会議システムであったためである。Zoom は JFBKK 日本語部で所有していた有料アカウントを使用した。当時、Zoom はセキュリティの脆弱性が懸念されていたこともあり、以下のルールを設定し使用した。

(1) ニックネーム⁽⁴⁾リストの作成

Zoom への入室を許可する際に、確実に参加者を判断するため、クラス毎にニックネームリ

ストを作成した。参加者にはミーティング入室時に Zoom に表示する名前を「ニックネーム (カタカナ表示) @学校名 (アルファベット)」に設定するよう依頼した。

(2) ミーティング ID とパスコードの設定

Zoom のミーティングを設定する際に、ミーティング ID とパスコードを毎回新しく設定し、セミナー開始1時間前に参加者にメールにて知らせることとした。

(3) 入室許可の徹底

参加者がミーティング ID とパスコードを入力し、一旦「待機室」で待機する形をとった。各クラスの担当調整員2名が参加者の名前を確認した上で、入室の許可を行った。

3.2.4 オリエンテーション

オンラインセミナーへの参加が初めてであったり、Zoom に慣れていなかったりした CP も多かったことから、セミナー開始の1週間前にオリエンテーションを1時間程度行った。クラス毎に、Zoom の基本的な使い方や参加時の注意事項等を、講師と調整員が分担して説明した。さらに、参加者同士の意見交換の機会とするために、オンライン授業の経験について共有したり、セミナーに期待すること、学びたいことをシェアしたりする時間を設けたクラスもあった。

3.3 セミナー実施概要

3.3.1 各回の流れ

3.1「セミナーの概要」で述べたように、各セミナーは、Zoom を用いて行い、1回あたり1時間と設定した。1時間のセッションは、『いろどり』の「初級2 この教材の使い方」を参考に、「Can-do の確認、活動、Can-do チェック」という流れで進めた。セミナーの時間が限られていることから、「話す」「聞く」を中心に組み立て、「読む」「書く」については、セミナー後に宿題としてそのトピックに沿った文章を Facebook グループに投稿することとした。セミナーは各回、担当講師であるタイ人専任講師と日本語専門家それぞれの良さを活かせるようにクラス毎で役割分担を決め、チームティーチングで進めた。

各回実施前には、講師2名と調整員2名でクラス毎の事前打ち合わせをオンラインで行った。セミナーの流れを確認するだけでなく、実際にセミナーで使用する Zoom の機能を試してみることもあった。

さらに各回実施後には、クラス毎に担当者でふりかえりを行い、その内容を記録したふりかえりシートを Microsoft Teams に保存して JFBKK の関係者が自由に閲覧できるようにした。CP の様子やテクニカル面についての課題等もチャットやビデオ通話で全体に情報共有し、クラスを超えて問題解決に努めるようにした。

3.3.2 目的達成のための工夫

セミナーの3つの目的【日本語】【交流】【体験】を達成するため、次に述べる工夫を行った。

日本語については、CPの日本語レベルはN2からN5と幅があったが、全員が同じゴールを目指すのではなく、それぞれが日本語で「できること」を確認し、日本語能力を維持することに主眼を置いた。

交流については、初対面のCPもいたため、Zoomのブレイクアウトセッションでは、できるだけ異なるペアやグループでの活動となるように配慮した。少人数のグループで日本語の表現を確認しながら話し合うような機会も設けた。

体験の面では、各CPが今後オンライン授業を実施していくうえで参考になるようにと考え、活動の中でZoomのブレイクアウト機能、投票機能、ホワイトボードといった様々な機能を取り入れるようにした。また、オンライン授業のみならず、対面授業でも参考になるように、シャドーイングや少人数での協働の時間を設ける等した。新しい活動やツールを紹介する際には、その効果と目的を考える時間を設けるなどして、ただ体験して終わりにならないよう工夫をした。

さらに、教師の交流・体験を深めるため、1時間の『いろどり』セミナー後に、希望者を対象に20～30分程度、Zoomを用いて参加者間で意見交換を行ったクラスもあった。例えば、あるクラスではオンライン授業を実施していくうえでの悩みや現状をCP同士で共有し、講師がコメントをした。また、「オンライン授業で楽しく学ぶために、どのように授業デザインを工夫したらいいか」「オンライン授業で大切なことは何か」等、毎回トピックを決めて、CP同士が教師としてふりかえり、話し合える場を設けたクラスもあった。

3.3.3 NP ゲストセッション

日本人との交流の機会の提供と、日本語で学んだことを実際に使ってみることを目的とし、セミナー最終回の5回目、6月下旬に過去のNPを招いてゲストセッションを行った。本セッションでは、セミナーの2～4回目に学んだ「食事」「旅行」「日本の年中行事」の中からクラス毎、またはグループ毎に1つのトピックを選び、トピックについてCPと日本人ゲストとの間で日本語を使って話し合い、交流した。

事前準備として、各クラスのCPは、3名ずつ4つのグループに分かれ、自分たちで選んだトピックに対して質問やスライドを用意した。また、ゲストにも事前にトピックを知らせておいたため、そのトピックについて下調べをしたり写真やスライドを準備したりしたゲストもいた。

ゲストの募集は、6月初旬に調整員からNP6期（2018年度派遣）とNP7期（2019年度派遣）にメールにて通知を行い、Google Formsで受け付けた。申し込み時の日程の希望を参考に、調整員がクラス分けをし、6期7名、7期9名の合計16名が4クラスに各4名ずつ参加した。

ゲストセッション開始の約1週間前に、16名のNPを対象にオリエンテーションを1時間程度実施し、本セミナーの趣旨・目的についての説明ならびに、ネットの接続確認、Zoomの使用方法や注意事項の確認を、調整員が中心となって行った。セミナー中にテクニカル面でトラブルが起きた際も、調整員がゲストとメールで連絡を取り合い、フォローを行った。

ゲストセッション当日には、グループ毎に1名のNPがゲストとして入った。準備したトピックについてグループ毎に話し合いを行い、グループで話し合ったことをクラス全体に共有し、その後またグループに分かれてゲストセッションのふりかえりを行った。

参加したNPからは「日本語を考えて話した。やさしい日本語を意識した」「今、NPがいなくて文化紹介に困っている先生もいると思う。役に立てたことが嬉しい」という声が聞かれた。

CPからは「久しぶりに長い時間日本人と話せて、習った日本語が通じるとわかって嬉しかった」「ゲストセッションを通じて、教科書に載っていない日本文化事情がわかって良かった」という声が挙がった。

4. セミナーの成果と課題

4.1 CPへのアンケート結果

セミナー終了後に、Google Formsを用いて参加者47名へのアンケートを行った。アンケートでは、セミナーの満足度、3つの目的の達成度、オンライン日本語授業の経験、セミナー運営面、教材について5段階で評価し、その理由についても簡単に記述してもらった。アンケート結果から、本セミナーの成果と課題について述べる。

4.1.1 セミナーの総合満足度

本セミナー全体の満足度は、5段階評価で「5. 満足」45名、「4. やや満足」2名で概ね高評価であった。コメントでは、「オンラインの授業でいろいろな教え方や授業デザイン等が体験できた。ほかの講師とオンラインの授業デザインについて話し合っ、アイデアをシェアした。自分の授業で応用したい」「日本語を使い、日本語での会話を楽しめた」「様々な学校の先生方と知識を交換し、実際に生徒に教える前にオンライン授業を試すことまで出来た」といった声が挙がった。

4.1.2 セミナーの3つの目的の達成度

セミナーの3つの目的【日本語】【交流】【体験】の達成度について、それぞれ5段階評価で質問したところ、概ね達成できたという回答を得た。

【日本語】「本セミナーは、日本語能力を維持するために役立ったか」は、「5. 役に立った」40名、「4. やや役に立った」7名だった。「在宅での子育てを伴う長い休み中、家族に焦点を当

てなければならず日本語の復習が出来ていなかったが、このセミナーのお陰で以前のように実際に日本語を使うことが出来た」等のコメントがあった。

【交流】「本セミナーを通じて、CP 同士の交流やネットワーク作りはできたか」は、「5. できた」が32名、「4. ややできた」が15名だった。「セミナー中、少人数グループに分かれたので他のたくさんの CP と知り合うことができ、Facebook 内に投稿された宿題を読んで更に知り合うことが出来た」等のコメントがあった。

【体験】「本セミナーの日本語のオンライン授業体験は役に立ったか」は、「5. 役に立った」が43名、「4. やや役に立った」が4名だった。「自分自身がオンラインで学習者になってみたことで、自身の生徒に起こり得る問題や障害を知ることが出来た」等のコメントがあった。

3つの目的の達成度「5. 役に立った」「5. できた」が【日本語】40名、【体験】43名だったことと比べると、【交流】は32名と一番評価が低かった。その点については、4.3で述べる。

4.1.3 セミナーの運営面

セミナーの運営面について、「回数」「時間」「ツール」の3点の質問を行った。

「授業の回数（5回）は適当だったか」の質問には、「ちょうどよかった」が44名、「やや多かった」が1名、「少なかった」が2名だった。概ね回数は適当という評価であり、新学期開始前の学期休み期間を活用できたと言える。

「1回の授業時間（60分）は適当だったか」については、「ちょうどよかった」が39名、「短かった」が5名、「やや短かった」が3名だった。「ちょうどよかった」と回答した CP からは「学校の仕事もあったのでちょうどよい時間だった」「集中力が続く長さだ」、短かったと回答した CP からは、「2時間であれば学習者はよりしっかりと学習出来たと思う」等のコメントがあった。オンラインセミナーの長さについては、今後さらに検討の必要があるだろう。

「授業で使用したツール（Zoom）は適当だったか」については、「適当だった」が41名、「やや適当だった」が6名だった。実際に Zoom を授業で使用している、あるいは使用予定の CP も多かったため、Zoom の利点、課題を体験できたことが評価されたと考えられる。

4.1.4 教材『いろどり』について

今回のセミナーで使用した教材『いろどり』についても参加者の声を聞いた。「『いろどり』は、今回のセミナーの対象者や、目的に合っていたと思うか」という5段階評価での問いに対して、「5. そう思う」42名、「4. 少しそう思う」3名、「3. どちらとも言えない」2名という結果が得られた。良い面として、「内容がやさしくて、語彙が多い。会話もあって、いろいろな練習ができた」「内容やコンテキストが日常生活で日本語を使う人に即している」といった声が挙がった。N2から N5まで幅広い日本語レベルが混在したクラス構成にしたため、内容が簡単

すぎて飽きてしまう、または難しく授業についていけないCPが出ないかがひとつの懸念事項だったが、特に問題はなかったことが分かった。

課題として、「学習者は日本語の基礎がなければならない」「日本での生活のために日本語を学習する人にとってこのテキストはとても良いと思うが、自分の生徒にとってはあまり適切ではないと思う」といったコメントが挙がった。このコメントから『いろどり』が日本での生活や仕事のための教材であるということがCPに理解されていたと言えるが、中等教育現場で扱うには選ぶトピックや場面、学習者の日本語レベルへの注意が必要だということが確認できた。

また、『いろどり』を使って勉強したことで、どんな日本語力が伸びたと感じたか。(複数回答可)という質問に対しては、「話す力」38名、「聞く力」42名、「読む力」26名、「書く力(PC・携帯で)」30名という結果が得られ、セミナー内で重視した「話す」「聞く」を中心に、「読む」「書く」の能力も伸ばせたという実感を得られていることが分かった。

4.2 セミナーの成果

セミナーの成果を4点挙げる。1点目は、4.1.2で述べたように、セミナーの3つの目的である「【日本語】日本語でやりとりする機会を通じて、日本語力を維持する」「【交流】CP同士の交流やネットワークづくりの機会を提供する」「【体験】オンラインの日本語授業を体験する」について、概ね達成できたことである。コロナ禍においてもCPに日本語でやりとりする機会を提供できたことで、「今日本語を話す機会が少ないが、これから日本語の勉強をがんばっていきたい」といったコメントが挙がる等、今後の日本語学習の動機付けとなったことも分かった。

2点目は、セミナー中のCPとのやりとりを通じて、コロナ禍における現場の情報をリアルタイムで得られた点である。各地域の学校や日本語授業の状況、教師や生徒の様子、通信環境の状況等、今後JFBKKが支援を続けていく上でも参考になる有益な情報を得ることができた。

3点目は、オンラインによる教師支援の可能性を広げられたことである。これまでJFBKKによるCPを対象としたセミナーは、タイ全土からCPがバンコクに集合し、対面で実施していた。従来のセミナーでは長距離の移動がCPの負担になることもあったが、オンラインでの開催により、タイ各地のCPが空間を超えて容易に集まれることを実感できた。

4点目は、JFBKKの講師8名が同じ授業を担当することで、担当講師の学びの場になった点である。3.3.1で述べたように、本セミナーでは毎回各クラスの担当でふりかえりを行い、ふりかえりシートを共有し、関係者が自由に閲覧できるようにした。また、随時チャットやビデオ通話で情報共有を行った。これにより、授業の様子や取り組みを逐一知ることができ、自らの授業の参考にしたり、クラスを超えた改善に繋げたりすることができた。

4.3 セミナーの課題

一方、課題も残った。まず、セミナーの3つの目的の1つである【交流】が期待していたほどは促進できなかった点である。CP へのアンケートでも【交流】は3つの柱の中で「5. できた」32名（68.1%）と一番評価が低かった。その理由としては、「他校の先生と交流はできたが、ネットワーク作りまでいかない」「緊張をして、話すのに自信をあまり持っていないので、十分に話せなかった」という声が挙がっていた。対面型のセミナーであれば、セミナー中のみならず、休み時間や食事の時間等の何気ない会話から CP 同士の交流が深まることがあるが、オンラインセミナーで CP 同士の交流やネットワークをどのように深めるかも課題として残った。

2点目は、適切な時間の設定および管理である。セミナーの時間を1時間と設定したが、実際は1時間半を超えることもあった。講師からは「対面授業に比べ、オンライン授業は進行に時間がかかる」という感想が複数上がった。

3点目は、インターネット環境に左右されないオンラインでの支援の仕方が構築できなかった点である。本セミナーは、Zoom を用いたオンライン同期型授業を中心としたため、インターネット環境が原因でセミナーの受講に支障がでるケースが散見された。各回の授業後に行ったアンケートでは、平均6割の CP が「特に問題は無かった」と回答したが、残り4割は「時々音声や画像が途切れたが、大きな問題は無かった」と回答した。クラスによっては、「音声や画像が途切れることが多く、授業に支障が出た」と回答する CP も数名いた。より参加しやすくなるよう、オンライン同期型以外のオンラインセミナーのあり方も検討する必要があるだろう。

4点目は、ゲストセッションで NP の能力や意欲を活かしきれなかった点である。3.3.3で述べたように、NP はタイの教育現場で日本文化紹介を多く行ってきた経験を活かして、スライドを準備してきたり、やさしい日本語を意識した話し方をしたりしていた。そのため、CP も NP との交流を通じて、「日本語が通じた」「日本の文化をより理解することができた」という実感を持つことができた。しかし、本セミナーのゲストセッションは、1時間足らずの一過性の交流であり、NP の持つ能力や意欲を活かしきれたとは言えないものとなった。どのようにしたらオンラインでも NP の良さを最大限に引き出せるかは、今後の課題である。また、NP 事業の柱に「NP 自身も現地の言葉や文化を習得し、日本とアジアの架け橋となること」があるが、オンラインでの取り組みがそれを満たすことができるか、今後の事業の取り組み方を検討する必要がある。

5. まとめと今後の課題

コロナ禍の中で行われた本セミナーにより、オンラインによる教師支援の可能性を広げられた。アンケート調査の結果からも、本セミナーは CP の日本語能力維持の面でもオンライン授

業体験の面でも役立つものと受け止められたことが分かった。一方で、CP 同士の交流を促進できなかったこと、NP と CP との交流が一過性のものとなったことが課題として残った。

本セミナー終了後も JFBKK では、NP 事業の可能性を探るべく、オンラインでの日本語教育支援事業を実施していく予定である。CP 間の交流を深め、CP の教授力を向上させることを目的に「CP オンライン教授法セミナー」⁽⁵⁾、「CP よろず相談会」⁽⁶⁾を企画、実行している。さらに、NP と派遣校の生徒との交流を深め、生徒支援とするために、元 NP15名が日本からオンラインで1ヶ月間、生徒がコンテスト発表に向けて練習する際に指導する「オンライン日本語コンテスト」も12月の実施に向けて準備を行っている。

収束の見通しが難しいコロナ時代において、アジアの日本語教育支援を継続することはもちろん「NP がアジアと日本の架け橋になる」という目標のもと NP のオンラインでの活用の可能性を検討することは緊急課題である。そうすることにより、新たな形の NP 誕生につながる可能性をも秘めている。今後さらに JF 本部および NP 派遣国の関係者と情報交換や検討を行い、コロナ時代における NP 派遣事業のありかたを探っていききたい。

謝辞：CP 日本語オンラインセミナーで共に講師を務め、また本稿執筆にあたりご助言くださったプラパー セントーンズック氏、ノッパワン ブンソム氏、小島佳子氏、セミナーの運営を担当してくださった NP チームの調整員をはじめ、JFBKK の皆さまにこの場を借りて、心から感謝申し上げます。

〔注〕

- (1) 国際交流基金アジアセンター「パートナーズって？」<<https://jfac.jp/partners/overview/>> (2020年8月25日)
- (2) CP47名にセミナー実施後に行ったアンケートによると、オンラインの日本語授業実施の経験がある CP は、31名、今後実施予定13名、実施予定なし3名であった。
- (3) 調整員の平時の仕事は、NP の生活面のサポートや派遣校との事務連絡調整等である。
- (4) タイ人は本名の他にニックネームを持っており、職場を含め日常生活で広く使われている。
- (5) 「CP オンライン教授法セミナー」では、毎月異なるテーマで教授法に関するレクチャーを行っている。JFBKK の日本語専門家およびタイ人専任講師が月替わりで講義を担当。全5回 (2020年8月～11月、翌年1月実施) で1回1時間半程度、希望者を対象に Zoom で実施している。
- (6) 「CP よろず相談会」は、JFBKK のタイ人講師がファシリテーターを務め、CP が授業に関する悩みを持ち寄り、意見交換の場を提供することを目的とした取り組みである。2020年7月から2021年2月の月1回 (全8回、1回1時間程度)、希望者を対象に Zoom で実施している。

〔参考文献〕

国際交流基金「いそどろ生活の日本語 初級2 この教材の使い方」

<https://www.irodori.jpf.go.jp/assets/data/elementary02/pdf/Z_howto_jp.pdf> (2020年8月25日)

国際交流基金「いそどろ生活の日本語 いそどろとは？」

<<https://www.irodori.jpf.go.jp/about.html>> (2020年8月25日)